

らっぱ亭奇譚集

京フェス2015出張版

ブライドルグース

R・A・ラファティ

ベンジャミン・ブライドルグース老人はウイロビー一家を訴えようとしていた。一家が飼っている子犬のせいで、幾晩も眠れなかったからだ。請求額は五夜で締めて五百ドル。

トム・ウイロビーは怯えた声で言った。「マイラ、うちに五百ドルなんてあったっけ？」「ないのはわかってるでしょ。つてか、新聞配達の子に支払う一ドル八十セントすらないつてのに。もう三度も集金に来たのよ。どうしてボスにもっと昇給をお願いしないのよ？」最後の質問はすごく絞ったものだった。ウオリー・ウォルドルフは苦笑いした。というのも、ウオリーはトムのボスであり、少なくとも的の半分は自分だとわかっていたから。

「遠慮なく言っていよいよ、トム。悪いようにはしないからね。マイラ、なかなかいい提案だけど、トムはちよつと混乱してるみたいだ。いや、きみたちがどうやって必要なお金を稼ぐつもりなのかわからないんだよ。少なくとも見積もっても千ドル

がとこかかるだろう」

「だけど請求額は五百ドルじゃないか。法廷じゃなく内々で手を打って安くあげられないのかなあ」

「だめだね。やつは訴訟が好きなんだ。内々で手を打とうなんて持ちかけたなら激高するだろうね。なにか別件で君たちを訴えることになるだけさ」

「でもやつが勝訴する見込みなんてあるのかなあ。うちの子犬はそうたびたびは吠えないのに」

「正確に吠えた回数がわかるのか？ わかるわけないつて？ ふむ、むこうはわかっているぞ。やつの裏庭には正確に何回吠えたのかカウントする装置がしつらえてあるからな」

「うーん、うちの子犬はそんなに大声で吠えないんだけどなあ」

「正確にどれくらい吠え声かわかるのか？ やつにはわかるぞ。何デシベルか測定できる録音機もついているからな」

「もしやつの睡眠が一晚百ドルもの値打ちがあるつてのなら、一日中ずっと寝てたらいいんだ。二十四時間なら三百ドルになるつて。こんな馬鹿げた訴訟でやつが勝つなんてことあるのか」

「勝ち負けは問題じゃないんだ。もし負けたなら、また別件

で訴えてくるだろう。やつが私を訴えた時には、最初の三回はこちらが勝訴したが、その後四回続けてあちらが勝つたよ。やつは敗訴する以上に勝訴し、これまでに千回を超える勝訴をもぎとってきたんだ。凄い豪邸を建てて、銀行にはたっぷりの預金がある。すべて君たちのような相手に訴訟を重ねてきた結果なんだ」

マイラはトムに子どもたちをみてるよう頼んで、プラグド・ニッケル亭に出かけていった。

「ブライドルグースさんがなんとうちを訴えようとしているのよ」とバーテンのノコミスに言う。

「なんであんなのとこだけが例外だと思っただい。やつはオジー・マーフィを訴えた。裏庭で日光浴してた奥さんに興奮させられたってな。老人なのに、血圧が危険域まで上昇したってこった。やつは勝訴したよ」

「マーフィの奥さんが誰かの血圧を上昇させるなんて出来っこないわ。あたしなら出来るけど。でもあのひとがいったいどうやって」

「そうだね、マイラ。でもやつは勝訴したんだ。やつはフレディ・フォドルコを訴えた。フレディの庭に生えてたメシヒバがやつの庭まで広がってきたからだ。やつはジョージ・ミユレンドルフを訴えた。ジョージのゴミ焼却缶の煙で飼って

いた熱帯魚が具合悪くなったからだ。やつはコンチータが料理にニンニクを使ったって訴えた。やつのセントポリアの香りをだいなしにして品評会に出せなくなったからだ。やつはブランシェ・マナーズを訴えた。ブランシェの家の林檎がやつの家の林檎に受粉して果実の質が落ちたからだ。彼女は賠償金を取られただけじゃなく、樹を切り倒して二度と林檎を植えないって誓約書まで書かされたそうだ。やつはヴェラ・ヴァーブルを訴えた。魚の骨をゴミに捨てたからだ。やつの飼い猫の喉に刺さる危険があるってな。勝訴したよ。「いったいどうしろって言うのよ」ヴェラは裁判官に訊いた。「自分で魚の骨を飲み込めって言うの?」「ふむ、そのほうが良さそうだな」裁判官は応えた。「それが最善の策と申せましょう」もちろん、やつが勝訴した話ばかりだが、やつが敗訴したって話は聞こえてこないなあ」

「でも、どうしてあのひとを裁判官たちは贖罪するのよ」

「そのほうが自分らの身のためになるからだよ。やつの訴訟は三つにひとつが法的執行停止の請求や、判決の誤審や判事の偏見を訴えるものなんだ。誰も自分にはねかえってくるような判決は下したくないだろうしね。前にやつを訴訟ネタでからかったことがあるなあ。コナン・ドイルの小説に登場する田舎の偏屈老人が、有史前の人類を発掘している考古学者

を近親者の許可を得なかったからと訴えたって話をしたんだ。ブライドルグースは目の玉を頭のとっぺんから飛び出すくらいに見開いて、「なんでわしはそれを思いつかなかったんだろかっ。よしっ、わしも訴えてやるぞー」早速次の日には、大学やら財団やら学会やらまとめて訴訟を開始したね」「で、勝ったの」

「ドイルの小説では、たしか勝たなかったと思うな。しかしブライドルグースはいくつかの州とユカタン半島で勝訴をおさめたらしいね」

「いったい、あたしはどうやって千ドルも工面したらいいのかしら」

「きみの子どもたちは医学校に解剖用献体として売れるな。車と結婚指輪も売れるだろう。トムのオーバーコートは質入れするといい。あとたった三カ月で春だもんな。家中の家具はまとめてオークションにかけるんだ。だけど、まだ九百ドルは足りないなあ。どうやって工面するのか見当も付かないよ、マイラ」

「法律家になるにはどのくらいかかるかしら」

「五年か六年ってとこかな」

「もう少し早くなる方法は？」

「君が賢ければ、ちよっとは短くなるかも」

「あんまり時間はないのよね」とマイラ。

マイラは三ドル借りると、ダフィのガラクタ屋に行つて買物をした。「普及版・アンデイの使える家庭全書」を一揃い、こんな内訳だ。『忙しいビジネスマンのための格言と警句と食後のスピーチ百選』『新・手紙を書くための綴りと言葉選びのガイドブック・エチケツト事典付き』『標準的男性が知っておくべきやさしい家計簿のための算数入門・計算早見表付き』『家庭用法律相談ガイド・使える道路地図・よくわかる救急処置ガイド・医者がくるまでにできること（合本版）』マイラが欲しかったは最後のやつだけだったのだが、ダフィは分売してくれなかったのだ。マイラはこの四冊セツトに一ドル二十セント払った。残りの一ドル八十セントは新聞配達少年に渡す分だ。

金曜日午前の予審法廷はいつもブライドルグースの日だった。どうしても長時間かかるのが常で、その週にブライドルグースが開始した訴訟が八つから十はあるからだ。訴訟案件の内容が震え上がった犠牲者たちと、尊大なブライドルグースに対して読み上げられる。ブライドルグースはごきげんだった。つてか、いつもごきげんなのだ。

疲れた様子の判事がリストを読み上げる。金曜の朝はいつも疲れていた。永遠につづくブライドルグースの案件に恐れ

おののきつつ、疲れきって目を覚ますのだ。

「ブライドルグースによるアーサーへの訴訟、ブライドルグースによるベイリーへの訴訟、ブライドルグースによるカースルレーへの訴訟、ブライドルグースによるガイへの訴訟、ブライドルグースによるアーキンとエヴァンスへの訴訟、ブライドルグースによるヘリントンへの訴訟、ブライドルグースによるジョンソンとジョンソンへの訴訟、ブライドルグースによるラングトリとオバーショウへの訴訟、ブライドルグースによるウイロビーへの訴訟」

判事は大きく息をついた。ブライドルグースの犠牲者たちは怒りと苦しみで煮えたぎっている。そして判事は続けた。

「ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟A、ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟B、ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟C、ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟D」

「何、何、何だつてー」とブライドルグース。

「長いリストになりますよ」判事は言った。「わたしに繰り返させないでくださいね。ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟E・F・G。これは三つの強く関連した別案件の合同訴訟となります。ウイロビーとウイロビーとウイロビー、いずれも未成年であり、保証人たるウイロビーとウイロビー

によるブライドルグースへの代理訴訟となります」

「最後のは何だ。何でわしを訴えるんだ。わしを訴えたやつなんていままでいなかったぞ」

「最後の案件は、端的に言いますとクラレンス・ウイロビー九歳、クラリツサ・ウイロビー八歳、クレメンティン・ウイロビー七歳による合同訴訟です。肉体的・精神的に被った損害に対して各々が千ドルの賠償金を請求しています。今月十五日にベンジャミン・ブライドルグースの庭から追い立ててくらった時に、恐怖に駆られ、結果としてクレメンティン・ウイロビーは側溝に落ちて膝に傷害を負いました。四日たった今なお片膝には痂皮が明瞭に認められます。同一の事案によりクラリツサ・ウイロビーは両親の不興を買って戦慄を味わい、次の単語は読めませんが、さらに肉体的苦痛、あーい、わゆるお尻をピシヤリとやられました。クラレンス・ウイロビーの訴えによればこの結果としてその日の午後いっぱい外出を禁止され、映画に出かけられず、さらに」

「ナンセンスだ。こんな案件で訴えるなんて」

「実際に、これらの訴訟案件の摘要書はよく準備されており、類似案件の判例の引用も的確ですな。ブライドルグースによるウインビッシュへの訴訟案件で原告のオウムがウインビッシュの敷地内から箒で追い出された時に尾羽を失ったこ

とに対する裁定が引用され、オウムが横柄で卑猥な言葉を発したことによる暴力的な追い立ての正当化は半分しか認定されませんでした。他の案件でも、ちなみに全部で三十三の訴訟が進行しており、二十五万ドルを少し超えるくらいの金額が請求されていますが、そのすべてにきわめて適切な判例が引用されています。例えば、ウイロビーによるブライドルグースへの訴訟Cに含まれる案件のひとつでは、ブライドルグースによるライダー・ヴィスラップへの訴訟における有名な判例が

「いやいやいやっ」ブライドルグースはわめいた。「わしは裁判地の変更を要求するっ」そして法廷を飛び出して街中へ逃げ去った。

「ウイロビーさん」判事は訊ねた。「あなたはいつ法律を学ばれたのですか」

「水曜日の夜。もつと勉強するべきだったのでしょうが、最後まで本が読めなかったのよ。『やさしい家計簿のための算数入門・計算早見表付き』も読んだのよ。あなた、知ってるかしら？　どんな数字でも九で割るきわめて簡単な方法があるのよ。紙を一枚ちようだいな。教えてあげる」

Bridle goose (unpublished) R. A. Lafferty

カンザス州ブラックベリー・パッチの不思議な出来事
〔日曜版の記事から〕 抜粋 R・A・ラファティ

クロス・ティンバースに沿って、「大風山脈」として知られる（いや、広く知られてはいないけれど）山脈がある。テキサス湾岸からオクラホマ、カンザス、ネブラスカ、ダコタを経て、カナダまで至るものだ。グレートプレーンズと険しい森林地が始まり、平原から丘陵地帯へと下るところの、非公認の土地だ。そこは山脈の西側からいつも強い風が吹いており、男たちや少年たちがたくさんの風を揚げている。「大風山脈」は世界一、風揚げに適した地なのだ。なかでも最適な場所がカンザス州ブラックベリー・パッチであり、ドニファン郡の中にあるのだが、公的にそこには属していない。カンザス州ブラックベリー・パッチは、少年を乗せる風、大人を乗せる風がごくふつうにみられる、世界で唯一の地だ。ブラックベリー・パッチの西風はほんとに大きな風を支えよう。中には座席を設えた風もあり、熱気球のごとくゴンドラをぶら下げたものもある。ブラックベリー・パッチの住民だったら、一張の風を三人から五人くらいの大人が乗り込むこともまれではない。しかし、かの地の住民にはちよつと普通じゃないところ、ある秘密があるのだ。

ブラックベリー・パッチの地名の由来はインディアン時代に遡る。当時は百マイルにもわたって深く生い茂っていた
広大なセイヨウヤブイチゴの野は、ここ百年かそこらのうち
に入植者や農民たちによって少しずつ刈り取られすっかり
縮小してしまった。しかしその中心部のいまだ深く繁茂する
なかには秘密の土地があつて、ブラックベリー・パッチの民
が住んでいる。かれらはカウ・インディアンとドイツ系入植
者の混血であり、工場で生産するブラックベリー・ジェリー
を全米で販売している。そして凧とエア着ぐるみ服も製造し
ている。ブラックベリー・パッチには墓場も埋葬地もない。
住民たちは死期がくると、エア着ぐるみ服と凧でもつて、(お
どけた言い回しで呼ばれるところの)「天空の象の墓場」へ
赴くのだと信じられている。

カウ族はいにしえのインディアン時代から凧を揚げて
いた。丈夫でよくしなるオーセージオレンジの樹の骨組みに
ビーバーの皮を張った凧だ。凧を揚げる糸はブラックベリー
の蔦を編ったものだ。かれらの凧は一マイル以上にも高く揚
がり、凧乗りたちはエア着ぐるみ服を着て空中へと飛び出す
のだった。時には五十マイルも漂ってミズーリ河の広い流れ

を超え、油断ならぬミズーリ族のなわばりまで達することも
あつたという。かれらの子孫は、ドイツ系移民との混血とな
つた今でも、おなじやり方で凧乗りに興じている。ドイツ系
移民のテクノロジーにより、エア着ぐるみ服も凧もインディ
アンの時代からは格段に進歩した。凧や着ぐるみ服に使われ
ていたビーバーの皮はいまや頑丈なゴム様のポリエチレン
製となつた。以前は口から息を吹き込んで膨らませ、大きな
コルクの栓で空気を逃がさないように造られていたエア着
ぐるみ服は、いまやすべてに空気制御弁を装備している。そ
して空中浮遊者は、自転車用の空気注入器を携帯しているの
だ。エア着ぐるみ服を着たひとは軽快に歩行し、もしくはぽ
んぽんと飛び跳ねて移動できる。もし倒れたら、そのまま転
がって行つてもよいし、ぽんと跳ね起きるのも簡単だ。そし
て空中ではきわめて快適に移動できる。カンザス州ブラック
ベリー・パッチのエア着ぐるみ服着用者はミズーリ河を漂い
超え、ミズーリ州を横断し、イリノイ州に降り立つ。たいて
い干しブラックベリーを携帯してちびちび齧りながら漂う
のだ。かれらが着地する際には衆目を集めるものだが、その
エア着ぐるみ服の背中には広告が印刷されている。カンザス
への帰りはたいていミズーリ・カンザス運送会社の車両に乗
せてもらえる。この会社は、大口の広告クライアントなのだ。

きっかり二マイル上空である。

ジョン・T・ウーリイベア

カンザス・シテイ・スター新聞日曜版 掲載

Magazine section (excerpt) R. A. Lafferty

ブラックベリー・パッチの凧とエア着ぐるみ服には、にわかには信じがたい別の側面がある。それがかれらの大きな秘密だ。ブラックベリー・パッチに墓地はない。かの地の住民は自らの死期を悟ると、凧とエア着ぐるみ服で秘められた名の秘められた地へと赴くのだ。その地は、(おどけた言い回しでは)「天空の象の墓場」と呼ばれる。エア着ぐるみ服を着て一マイル上空まで凧で揚がり、空中へ飛び出して滑空をはじめ。いつものようにゆっくりと下降するのではなく、ミズーリ河を超えて上昇する。辿り着いた秘密の地は外からは大きな雲塊のようにみえる。しかし、その中は通常の雲とは異なり、銀が敷き詰められた半球状で、外からみるよりも遙かに大きく、水が流れ、緑の地が広がっている。そこには父や祖父たち、そしておそらくは母や祖母たちとの水入らずの幸せな暮らしが、かつてブラックベリー・パッチに住んでいたすべての善き人たちとの至福の時が待っているのだ。

この最後のくだりは正確とは言えないかもしれない。というのも、このいわゆる「天空の象の墓場」から戻ってきたという報告はいまのところないからだ。

さて、このおどけた名前と呼ばれる大きな秘密の雲はどこにあるのだろうか？

それは間違いなく、ミズーリ州カンザス・シテイ中心部の



昨年ラファティ生誕百周年ではSFマガジンでラファティ番長こと牧眞司氏の旗振りにより本邦のラファティアが結集した空前の大特集が生まれ、生誕記念イベント一期一宴の開催、坂永雄一氏を中心とした京大SF・幻想文学研究会のメンバーとOBによるラファティ・トリビュート『つぎの岩』の刊行（掲載された伴名練『蓮托掌（R・X・ラファティ）』はめでたくも『年刊日本SF傑作選 折り紙衛星の伝説』に収録）と、大変な盛り上がりを見せた。海外ではラファティ・ファンジン『Feast of Laughter』が刊行され、本邦での現況報告と、京フェス2010での合宿企画「ラファティの次に読む100冊を考えよう」のリストを記載した（掲載順に、松崎健司、林哲矢、牧眞司、柳下毅一郎、加藤逸人、橋本輝幸、坂永雄一）。そして今年の五月にはSFセミナー本会企画「生誕101年、改めて若者もラファティを推す」にて私と橋本輝幸氏、坂永雄一氏がラファティ愛を語り、合宿企画では牧眞司氏を加えての鼎談でさらなるラファティ・ムーヴメントの盛り上がり誓ったものだ。SFマガジン十月号には「苺ヶ丘」が伊藤典夫訳で掲載され、前年の特集号では間に合わなかった御大の登場が嬉しかった。さて、なんとも華々しい生誕百年だったが、単なるお祭りで終わらせてはいけないとも思うのだ。ラファティにはまだ

まだ未訳の傑作が目白押しで、せっかくの翻訳紹介の波が途切れぬように、みんなで活動が続けていくことも大事である。と言うわけで、ささやかながら京フェス2015にあわせて「らっば亭奇譚集出張版」を作成してみた。

今回は未刊行短篇と、オムニバス形式の短篇から一エピソードを訳出してみた。「ブライドルグース」は作中にコナン・ドイルの作品が引用されており、Twitterで「原典は何だろう」と呟いたところ、即座に北原尚彦氏から『バスカヴィル家の犬』だどご教示いただいた。流石！ お礼に翻訳しますーと応えて今回の掲載となったものである。本作は、「七日間の恐怖」のウイロビー一家シリーズでもあり、今回は母親のマイラが主人公。やはり、あのクラリッサの母親だけあるなーと思わせるキャラでした。「日曜版の記事から」のジョン・T・ウーリーブアはあちこちの新聞の日曜版に胡散臭い記事を載せるライターで、訳出したエピソードの他にも、雁の群を率いる空飛ぶ魔物や、総て顔面が削り取られている聖クリストファーの彫像の謎、クローンを悪用して三倍の稼ぎを得る方法など、おなじみの法螺話（いいや、本当の話だよ！）が楽しい作品。いずれ完全版もお届けしたいと思う。

さあ、つぎのラファティにつづきますように！